J-30

わらび劇場を中心としたあきた芸術村の改修案（３）
心身を育む場

Bracken Akita Art Village renovation plan with a focus on theater（3）

The place where a mind and body is brought up

○赤堀厚史[1]，松下知可[1]，重田秀之[2]，佐藤信治[3]
*Atsushi Akabori [1], Chika Matsushita[1], Hideyuki Shigeta[2], Shinji Sato[3]

Troupe Warabiza the Takarazuka Revue, which is one of Japan's leading theater group second only to the Shiki Theatre Company. Also bracken theater, home to the theater company Warabiza is located in Akita Prefecture Semboku, is located in the unusual rural as theater company. Currently bracken theater has become one of the autumn artistic village of facilities, aging is in progress has passed more than 40 years from completion. Also by harmful rumors since the Great East Japan Earthquake as a whole bracken theater, has Tonoi is foot traffic, even 5 years after the current from the earthquake, Art Village overall restructuring that autumn also in order to bring back the audience there is a need.So we make a proposal of facilities such as the entrance of the Akita Art Village.

1.　はじめに

劇団わらび座は宝塚歌劇団，劇団四季に次ぐ国内有数の演劇集団である．劇団わらび座の本拠地であるわらび劇場は秋田県仙北市に位置しており,劇団としては珍しく地方に位置している．現在わらび劇場はあきた芸術村の施設の一つとなっているが,竣工から 40 年以上が経過しており老朽化が進行している．またわらび劇場全体としても東日本大震災以降の風評被害により．震災から 5 年経った現在でも客足が遠のいており,お客さんを呼び戻すためにもあきた芸術村全体の再編が必要とされている．そこで私たちはあきた芸術村の入り口とな施設の提案を行う．

2.　計画背景

仙北市は秋田県の東部に位置し,日本で最も深いと言われる田沢湖をはじめとして、東南北に秋田駒ヶ岳、八幡平、仙北平野などの自然が広がっており、観光業が盛んである．また、角館地区は武家屋敷などの重要伝統的建築物が多くみられ、みちのくの小京都と呼ばれる歴史的な街が有名である．

今回計画を行ったあきた芸術村は年間 300 もの公演を行うわらび劇場をはじめとし、多くの体験施設をもち多くの観光客が訪れる観光地である．周辺施設との関わりだけはなく、田沢湖周辺のイベントとも接続させる。イベントとイベントの中継地点となることで人の呼び込みを図る。また季節ごとに様々なイベントつながることで、飽きることのない多様性のある施設となる．

3.　計画敷地

現在秋田芸術村には，わらび劇場，森林工芸館，デジタルアートファクトリー, 温泉ゆぽぽ, 食事処ばっきゃ, 田沢湖ビール，ブルーベリー農園，民族芸能研究所などの施設がある．また芸術村において特に中心性を帯びた散策路は，誰もが一度は足を運ぶであろう場所と言える．わらび劇場の改修に伴い，新たな地域コミュニケーションの場としての機能を追加したこの案を，敷地の中央部分に設置することで周辺施設に足を運んでもらえるきっかけをつくり，自然な人の流れを作り出し，発信の場となるような施設提案を行う．

Fig1. left: Skymap　right:map

4.　建築計画

もともと敷地中央に植わっている木を残し，その木に寄り添うような形で形成させる．本建物はデッキ部分とホワイエ部分，フリースペース、小劇場の 4 つから成り立ち，ホワイエは待合室としての機能のみでなく，芸術村の要素が介入することで新たな目的を見出せる発信の場として機能する．大屋根で天井高を高くすることでさ

１：日大理工・学部・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.
２：日大理工・院(前)・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.
３：日大理工・教員・海建　Department of Oceanic Architecture & engineering, CST. , Nihon-U.

らに広い空間を生み出す．劇場内は既存の小劇場側からのスタッフ動線と搬入動線を確保し劇場へとつながる．客席は２階建て２７８席の小規模の

ものとし，わらび座の改修の期間中に，公演が途切れないように，代わりにこの小劇場を使用する．改修が終わった後でも，小規模の公演や，稽古，コミュニティースペースとしても活用ができる．

Fig2.　Front

フリースペースでは，ブルーベリー農園の紹介や，クラフトの展示などをおこない，周囲では人がゆっくりくつろげるような，半屋外空間を創出する．

Fig3.　free space (left:usually.　right:event)

目的をもって訪れる人も，ただ通りかかった人にも興味を持ってもらえる空間づくりを目指す．農業体験を都内の修学旅行生を対象に実施して，稲架けワークショップを行い，新たな体験型観光資源の創出の場とする．

デッキ部分は屋外空間だが，屋根がかかっており，木々の木漏れ日や風を感じることができ，これまで暗く緑地が広がるだけだった空間に人々の賑わいや，緑が建築から垣間見えるような景観へと移り変わる．また，夜には足元がライトアップされ，昼間の賑わった空間とは少し違った落ち着いた空間に変わる．

Fig4.　wood deck　(left:Noon.　right:Night)

半屋外部分が多いため，四季折々を五感で感じることのできる空間を提案する．

Fig5.　free space

5.　参考文献

http://www.warabi.or.jp

Fig6.　Section